③ 被災地発 支え合い活動事例紹介

災害をきっかけに地域が動き始めました。これまでの地域のつながりが被災地の復興を後押ししています。そんな地区ごとの取り組みをご紹介します。

川辺（かわべ）

「川辺復興プロジェクト　あるく」

地域のつながりかみしめて 確かな一歩をふみしめる

多くの人が集まって、子どもたちの声が響いていた元気な川辺の景色を取り戻したい…。

豪雨により地区の99％の世帯が床上浸水に見舞われた川辺地区で、住民中心の復興に向けた新たな挑戦が始まりました。

避難生活でばらばらになった住民同士のつながりを紡ぎ、地域を再構築するためには、家の復旧も必要ですが、心が満たされる場や出会いのきっかけづくりが大切です。

そんな思いを受けて「川辺地区まちづくり推進協議会」の槙原さんを中心に結成した「川辺復興プロジェクトあるく」は、30代から60代までの多くの担い手によって運営され、川辺小学校に設置されたプレハブは地域のイベントや居場所づくり、情報発信等の拠点となっています。

毎日午前中に開所している交流スペースでは、おしゃべり、レクリエーション、創作活動などやりたいことを楽しみます。
「あるく」のスタッフも毎回２名は常駐し、暮らしの相談にも応じています。

地域交流スペース
「あるく」

開所日時：毎日
９：００～１２：００
場　　所：川辺小学校敷地内
（倉敷市真備町川辺720）
内　　容：住民同士の交流・情報交換・イベント開催等

７月９日から無料通信アプリLINE（ライン）でグループ「川辺地区みんなの会」をつくり、被災者や支援者みんなが登録し、地域のイベント情報や川辺の様子を発信し情報共有を図ってきました。

平成31年１月現在、約550人の方が登録しています。このLINEを活用して、現在の居住地や地区に戻る意向などをたずねるアンケート調査を実施し、地域の声や課題を知ったことで、住民が気軽に集える交流スペースの立ち上げにつながりました。

８月からスタートした毎日開催の炊き出し支援。地元のスーパーマーケットが再開する10月中旬まで約２カ月間にわたって、食事を通した地域の交流の場として大きな役割を果たしました。

地域交流スペース参加者のみんなで作ったクリスマスカードを幼稚園の子ども達に配りました。あたたかい居場所から、あたたかい支援が生まれています。

川辺の支えびと

私たちは「支えびと」であり「支えられびと」

槙原（まきはら）　聡美（さとみ）さん　✗　松田（まつだ）　美津枝（みつえ）さん

「あるく」の代表を務める槙原さんと相談役の松田さん。

気心しれた関係性が「あるく」の活動の推進力となっています。

二人はまるで本当の親子のように何でも話し合い、よく笑い、とにかく前向きです。

地域愛にあふれた二人の魅力に惹かれながら住民・支援者のネットワークが広がっています。

何でも話し合える関係性が素晴らしい、槙原さん（左）と松田さん（右）

地域での子育て支援を行っていた松田さんと槙原さんが親子サロンで出会って13年、二人の交流は今も子育てや地域での活動を通して続いています。

今回の災害での活動を振り返り、二人は今まで地道に続けてきた地域活動の意義について語ります。「これまでのつながりがあったからこそ今があって、みんなが活動を支えてくれている。私たちは『支えびと』であり『支えられびと』です」二人の笑顔がとても心強く感じます。

一歩前へ！その先へ！これからも地域と一緒に復興の歩みを続けます！

岡田（おかだ）

「岡田分館での集い」

岡田を思う気持ちが集まったら これからの岡田が見えてきた

発災後、岡田地区の公民館「岡田分館」では、ボランティア活動のサテライト拠点として、多くのボランティア活動の現場調整を行ってきました。

そこに、被災の状況に関係なく地域の方が集い、ボランティアの道案内や詳しいニーズの把握など、よりきめ細かい支援が行われました。そして、ボランティア活動の合間には、自然と住民同士がそれぞれの心境を語り合ったり、これからの地域の事を話し合ったりする場が生まれました。

「ここに来たら、誰かに会える」岡田分館は、地域のなかの常設の居場所となり、少しずつ被災した館内の片づけをして、多くの人が集まるイベントが行えるまでになりました。岡田地区で練ってきた「大きな夢」が広がる出発点は、ここでの「何気ないおしゃべり」からでした。

地域の方が地図を確認し、ボランティアの活動先を教えてくれます。地元住民だから分かる「気づき」と「気配り」で新たなニーズも発見できました。

イベントに集うことで、久しぶりに再会される方も多く、至るところでおしゃべりに花が咲きました。遠方に避難されていた方も、みんなに会うために戻ってきました。

発災後、PTAと連携した「秋祭り」、百人以上が集った「歌声喫茶」、大船渡市との交流から生まれた「さんま祭り」など、多くのイベントが実施されました。

岡田の支えびと

岡田のこれからを岡田のみんなと考えたい

岡野（おかの）　照美（てるみ）さん（左）　✗　出口（でぐち）　浩司（こうじ）さん（右）

「岡田地区まちづくり推進協議会」で活動されている岡野さん。「このまちを良くしたい」その想いから、幅広い世代とつながり、イベントの企画をしている岡野さんのもとに、多くの協力者が集まります。

岡田分館での災害ボランティアの支援がきっかけで集まってくれた男性の中には、「もしボランティアに来ていなければ、自分は家から出ていなかったかも」という方もいます。家や畑、仕事道具が被災した人など、状況は様々ですが、それぞれが自分の役割を考えて、出来ることをしています。その積み重ねが、岡田分館に集うみんなの笑顔につながっています。

そして、そんなたくさんの協力者の中には、アイデアが豊富で、地域情報の発信役も担う出口さんの姿もあります。

自分たちだから出来ることをしようと、ボランティアの方に被災の体験を「伝える」活動を行う岡野さん

岡田の活動を記録する出口さん。優しい視点で岡田の復興を見守っています。

これまで接点のなかった二人が災害支援をきっかけに出会い、多くのイベントを作り上げてきました。岡野さんと出口さんの作戦会議は、時に真剣に、時に漫才の掛け合いのように行われています。みんなが「楽しむ」ための作戦会議を「楽しみ」ながら続けてます。

園（その）

「みんな」で過ごした園だから「みんな」が帰れる場でありたい

「有井女子会」

末政川が決壊し、有井地区を中心に大きな被害を受けた園小学校区。自宅だけでなく、地域の集いの拠点の多くが浸水し、使うことができなくなりました。

決壊箇所のすぐ近くにある下有井公民館は奇跡的にわずかな補修で建物を活用することができたため、災害ボランティアセンターの下有井サテライトとして、その後は地域住民が気軽に集い、戻ってくることができる復興の拠点として新たな歩みを始めました。

発災から4カ月が経ち、下有井公民館に懐かしい顔ぶれが戻ってきました。これまでは下有井地区限定だった対象を有井地区に広げて開催された「有井女子会」復活の日には、いたるところで抱き合い、再会を喜び合う女子たちの姿がありました。

気心知れた仲間同士で集い、おしゃべりができる地域の居場所は、みんなの帰りを待っています。

有井女子会

開所日時：毎月第３木曜日
　　13：30～15：00
参 加 者：有井地区の女子
内　　容：おしゃべり・情報交換
　　・レクリエーション等
場　　所：下有井公民館

夏の間、下有井公民館は災害ボランティアセンターのサテライトとして沢山のボランティアさんの前線基地となりました。

「有井女子会」の他にも、地域のお母さんや子ども達が気軽に集える場所として開放されている下有井公民館。お母さんたちは水に浸かった写真を洗浄して、持ち主にお返しする写真洗浄ボランティアも始めています。

仲良しさんがいてくれて、近況を話すだけで会場は笑いと元気に包まれます。第２・第４木曜日の午後からは「薗ふれあいカフェ」もオープンしました。

薗の支えびと

奇跡的に残った下有井公民館で奇跡のような出会いがありました。

浅野（あさの）　静子（しずこ）さん　✗　旅商人（たびしょうにん）　原（はら）　亮章（りょうしょう）さん

発災後いち早く、埼玉から出身地である倉敷に戻り、被災地支援活動を開始した原さん。特に被害の大きかった有井地区を担当しました。

災害ボランティアセンターの拠点を探すなかで、浅野さんと出会い、そこから下有井公民館での様々な取り組みがスタートしました。

長く、民生委員や地区社会福祉協議会の会長として薗地区を見守り続けている浅野さん。

自宅が被災したにも関わらず、地域のため、住民のために休むことなく地域での支援活動を続けています。

下有井公民館をボランティア活動の拠点にするために力を尽くし、地域のなかで気になる方と支援をつなぐ役割も果たしています。「有井地区は大きな被害を受けた地区だけど、これまで培ったつながりはきっと災害を乗り越える」そう信じて、居場所づくりを全力でサポートしています。

再会をあたたかく見守る浅野さん

一杯一杯、原さんが思いを込めて珈琲を淹れてくれます。旅商人のキッチンカーにはいつも人と笑顔が集まります。

原さんは「災害ＮＰＯ旅商人」としてボランティア調整や地域のつながりづくりの仕掛人だけでなく、珈琲屋さんという顔もお持ちです。住民が集うイベントや夜の町かどにキッチンカーで登場し、優しいあかりと落ち着く笑顔、美味しい珈琲で来る人の心を温めます。

二万（にま）

「二万仮設憩いのBar〈場〉」

開かれた仮設の「居場所」で語る夢 地域の未来も拓きます

二万仮設団地に併設された談話室は、住民同士で話し合い、朝から夕方まで開放することに決めました。これによって、談話室は誰でも気軽に立ち寄って、おしゃべりや情報交換ができる場になりました。

ほぼ毎日、仲良しになった女性たちが自然と集い、お茶を飲みながら交わす言葉には、これからの復興や地域づくりに大切なアイデアが散りばめられています。

「私ら女性はこんな風に集まれるけど、男の人は全然来んなぁ・・家に居るばぁじゃ、良うねぇなぁ」
「男は酒でもねぇとおえんじゃろ」

そんな、談話室での雑談から、住民みんなで企画して実現したイベントが「二万仮設憩いのBar〈場〉」です。仮設住宅の住民に加えて、お世話になっている二万の地域の方にも声をかけました。

飲み物とおつまみ一品を持参して、バーのママはいつも談話室に集っている女性たちが担当します。

男性もたくさん参加をしてくださり、このBarが今後の支え合い活動や一人一人の活躍の場へと拓かれていきそうです。

いつもはわが家のママさんが、今夜はBarのママに変身。

おかやまコープさんの企画で毎月１回サロンを開催しています。
12月はクリスマス飾りとケーキを作り、みんなで美味しく食べました。

「クリスマスシーズンは、イルミネーションを飾り、明るい光で暮らしの場を盛り上げたい」
寄贈された電飾の取り付けは、住民自らが脚立にのぼり、みんなで楽しみながら行いました。
夜になると電飾をまとった「光の木」が、とても美しく輝き、仮設団地を照らします。
左の写真は、電飾の寄贈や設置に協力してくれた支援者さんに感謝の気持ちを込めた食事会の様子です。このイベントも住民自らが企画し、地元のまちづくり協議会等が応援して実現しました。

二万の支えびと

一人ひとりの元気が仮設団地や地域を元気にできると信じています

仮設団地のなかでの取り決めは、連絡員の中島さんを中心にみんなで話し合います。団地の住民に細かく声をかけ、談話室でざっくばらんにおしゃべりをしながら、方針を決めていきます。
談話室が常時開放されていることにより、支援団体ともつながりやすくなりました。衣類などの支援物資を提供する団体は、物資を談話室に置いていくことで、住民も自分の都合の良い時に物資を選びに立ち寄ることができます。

談話室に集う女性たち

おしゃべりをしながら、支援物資をたたんだり、しっかり手も動かしています。

Barの企画もこの談話室の作戦会議で生まれました。抱え込まず、みんなにいつでも相談できる環境ができています。

中島さん一家

中島さん一家は、元気な８人の男の子とご両親の10人家族。仮設団地の連絡員も担います。子ども達は全員サッカーをしており、取材にお邪魔した日も、元気に外でサッカーボールを蹴っていました。
同じ団地の住民は「子ども達の明るい声を聞くと、気分が明るくなったり、仮設団地の中に居ても日常を感じることができる」と話します。
子ども達の元気が家庭や地域に元気を広げてくれています。

仲良しの８人兄弟は、寒い日でも元気にボールを蹴っています。

箭田（やた）

「箭田分館前ほっとスペース」

「箭田の集いの場＝『ほっとスペース』」

「会いたい」「話したい」思いの分だけ誕生した地域の「ほっ」とする場所

「真備に帰って来ても人に会うことがねえんじゃ」
「家を直すんが自分んちだけじゃったら」
「あの人はどうしょんじゃろ」

そんな住民の方々の思いから、見知った人と話ができる地域の集いの場が数多く誕生しました。

箭田での集いの場は「ほっとスペース」と呼ばれ、「できるだけ隣近所の人達で交流がしたい」という思いに応えるため、集まりやすい場所、馴染みのある場所等、地域の特性に合わせて4ヵ所に**創ら**れました。

「ほっとスペース」を何ヵ所も**創る**ことで、より暮らしに近い場所で集まることができ、また参加する場所が増えることで自分の予定に合わせたマイペースな交流が生まれました。

境地区ほっとスペース

しゃべり場の１つ、境地区ほっとスペースでは、元々近所の方が集まっていた倉庫を地域に開放し、老若男女問わず話がはずむ場所になりました。倉庫の所有者の妹尾さんは「町内の人が寄れて話ができるなら」と二つ返事で場所を提供してくださいました。

まきび公園ほっとスペースは、敷地も広く、車も駐車可能であったため、箭田地区以外からも参加者が大勢訪れました。
他の地区の方と交流を持つことで、情報の共有化や、新たなる支援者と知り合えるきっかけづくりとなり、人と人との出会いの場を創りだしたほっとスペースです。

坪田地区ほっとスペース

まきび公園ほっとスペース

坪田地区ほっとスペースでは、災害により離ればなれになってしまった地区の子どもたちが、久しぶりの再会に喜び、遊び出す姿もみられました。
大人だけでなく、子ども同士のつながりも支えているほっとスペースです。

箭田の支えびと

「ここに来れば、誰かに会えてしゃべって帰れる。そういう場が必要だと思った」

蛭田（ひるだ）　純司（すみじ）さん

真備よろずチーム研究所、箭田地区社会福祉協議会の方
（中央 蛭田さん）

支援物資配布場所箭田分館前

蛭田さんは、箭田地区で被災した地元住民のため7月10日から有志で始めた物資配布に12月末日まで関わっていました。

猛暑のなか毎日、支援物資の配布場所を整え続けた蛭田さんは、「地域の方の声を丁寧に拾いながら、少しでも必要なものが必要な人に届くように」と汗を流されました。

地域の方は、「支援物資を取りに行った際に、『地域の顔なじみ』がいるというのは、大きな心の支えになる」と話します。

また、箭田分館長、箭田地区社会福祉協議会、地元の有志、真備よろずチーム研究所の方々等も協力者として参加され、箭田の支援物資の配布場所は、笑顔溢れる場にもなりました。

呉妹

「呉妹訪問型サロン」

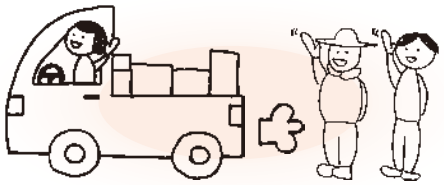
「また来るよ」と「また来てね」が笑顔と気持ちをつなぎます

7月の災害以降、「情報が入ってこない」、「物資が不足している」、「ご近所さんと話せる場がない」という住民の声に対応するため、呉妹では、住民、ボランティアによって「訪問型サロン」を立上げました。

軽トラックに、生活支援物資や被災者支援情報、お茶のセット等を積み込み、地域を訪ねます。地域の拠点も被災しているので、訪問先の倉庫や車庫がサロンの会場となります。

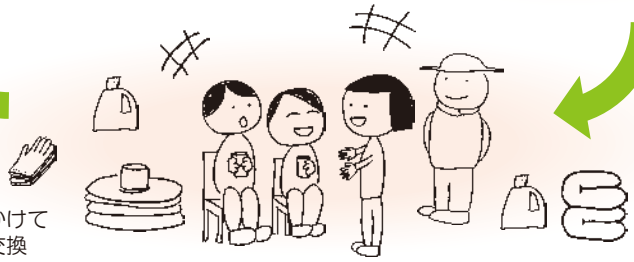
みんなが集まりやすい場所に出向いて、気軽に集える居場所づくりを応援することで、忙しいなかでも、ちょっとお茶をしながら話し、自然と笑顔が戻ってきます。

今まで当たり前にできていた世間話が、笑顔と気持ちをつないで日々の安心を紡ぎだします。



「家のことせんといけん」時間までにはおいとまします

自宅のお掃除をしているかたにお声掛け



ご近所さんにもお声をかけて
お茶を飲みながら情報交換

自宅で片付けなどの作業をされている方々に声をかけ、歩いてこれる距離で集まってもらい、支援物資の配布や情報提供、お茶をしながらご近所さんとのおしゃべりの場を実施しました。会場はご自宅のガレージ等をその時、その場でお借りしました。

「どうしょうたん」「これからどうするん」といった情報交換から「最近、疲れてしもうて何にもする気がおきんのよ」と顔なじみが集まると今まで言えなかった本音も言える。ほっと一息できる場となりました。

なじみの顔がそろうと自然と話がはずみます

呉妹の支えびと

「やってみようや」がみんなの背中を押してくれる

森本（もりもと）　常男（つねお）さん　✗　呉妹地区社協メンバーさん

呉妹地区社会福祉協議会の会長として活躍されている森本さん。みなし仮設で生活をしながら呉妹の自宅を再建されています。

被災してわずか2週間後に集まることが出来た役員さんと「がんばろう呉妹」というイベントを企画し、支援物資の配布や今後の相談をする場所として被災した地域のみんなを元気づけました。

その後も「呉妹わくわく会」では一緒に手打ちうどんの炊き出しをしたり、「オール呉妹交流祭」では被災した人もしていない人も呉妹地区みんなで集まれる場づくりに力を注ぎます。

みんなで集まって、たくさんのアイディアが出ると何から始めようか、何をしたら呉妹のためになるだろうかと悩み、立ち止まることもあります。そんな時、会長の「やってみようや」がみんなの背中を押してくれます。

月1回は池ノ上公民館に集まって、呉妹の状況や今後のことを話し合います。

服部

中尾　研一さん（左）、大島　千登世さん（右）

「見守り支え合い訪問」

日頃からの顔の見える関係づくりが尊い命を救う備えとなった。

災害が発生した7月6日夜10時頃、真備町服部に住む大島さんは、何も知らずに寝ていたところ、町内会長の中尾さんから連絡を受けた親戚に助け出され難を逃れました。

中尾さんは、近所の住民から「近くの川が異常な水量に達している」との報告を受け、日頃から服部地区小地域ケア会議で作成していた見守り支え合い調査票をもとに、緊急連絡先に連絡、「川が異常だ！　迎えに行けるのであれば迎えに行って！　無理なようであれば自分が助けに行く！」と伝えたとのこと。

この取り組みによって命を救われた大島さんは、「避難勧告が夜遅くに発令されたことと、高齢で耳も遠いし、雨音で何も聞こえない状況で、何もわからずに寝ていました。親戚に緊急連絡をしてくれなかったら、今頃はこの世にいなかった。本当にありがとう」と当時の状況と感謝の言葉を述べられました。

中尾さんは、「見守り支え合い調査票」を今でも大切に保管されており、「役が代っても後任に引き継いでいけるように取り組んでいきたい」と話します。

7月8日午前中の服部地区

水川（みずかわ）　毅（つよし）さん

服部地区小地域ケア会議の委員長の水川さんは、「見守り支え合い調査票は災害時にも役立つが、日頃から、気軽に声かけができる関係づくりのきっかけになればと取り組んできた。困ったことがあれば、ひとりで抱え込まず、皆で助け合っていくことが、様々な課題の早期解決につながると思う」と語っておられました。

見守り支え合い調査票は発災後にも役立ちました。日頃から地域の情報を把握していた地域の強みを活かし、災害ボランティアセンター服部サテライトでは、地域の方と一緒にニーズ調査を実施しました。復旧、復興においても、そのつながりの力は活躍しています。

地域の方と災害ボランティアの皆さん

服部の支えびと

みんなどこに居るのか・・・。みんなに会いたい・・・。

「集いの場」の盛り立て役　瀬崎（せざき）　宏子（ひろこ）さん

第１回目服部地区集いの会

自宅の復旧が進むなか、９月中旬に被災した人から聞こえてきたのは、「みんなでもう一度集まりたい」という声でした。

しかし服部地区では、以前まで地域の集まりの場であった真備公民館服部分館が全壊し、すぐには復旧も困難な状況でした。

そんななか、服部地区に住む瀬崎さんは、自身の自宅が全壊しているにも関わらず「地域のためになるのであれば」と、ご主人が経営されていた板金塗装工場跡地を提供され、９月下旬に「第１回服部地区集いの会」を開催しました。

再会された方々のなかには、「あんたが帰ってくるならわたしも帰ってくるよ」と抱き合う方もおられ、つながりを再構築するきっかけづくりの場となりました。今も服部地区集いの会は継続されています。

柳井原（やないはら）

「柳井原トレーラー仮設団地」

この場所で出会った人
この場所での支え合いが
これからの財産になっていく

柳井原仮設団地は、全国で初めて、各地からトレーラーハウスを集結させた応急仮設住宅です。色とりどりのトレーラーハウス51戸が建ち並びます。

団地内には、住民同士が顔をあわせ、交流ができるよう集会所が併設されているほか、話し合いで選任された4名の連絡員さんが、情報や交流をつなぐ役割を果たします。入居者同士の支え合いに加え、心強いのは、地元柳井原地区の存在です。仮設団地内の交流会や食事会の支援や仮設団地内で不足している駐車場を確保できるよう地域で調整するなど、仮設団地を地域の一員として受入れ、愛情を込めて見守っています。

団地内・地区内で、新しい支え合いの関係を築くことで仮設団地の集会所を「被災者だけでなく、地域みんなで活用したい」という意識も芽生えています。

12月に開催されたコンサートでは、地元住民や隣の高齢者施設のスタッフ・利用者を招待しました。

柳井原仮設団地は支援を受ける場から地域づくりをともに進める場へ広がりを見せています。

【クリスマスコンサート】日頃お世話になっている地域の方やお隣の施設の利用者さんもご招待。せっかくのイベントだからこそみんなで楽しみたい。

集会所で開催されているサロンの様子。この日は、好きな皮革を選んで、オリジナルのコインケースを作りました。仲良しの女性陣はみんなでワインレッドのコインケースで揃えました。

クリスマスイルミネーションを飾り付けた後「せっかくだから点灯式もしよう」の声。急きょ決まったイベントでしたが、すぐに連絡員さんが手分けして、案内に走ります。

柳井原の支えびと

せっかく用意してくれた集会所。これを活用してみんなが元気にならな、もったいない

池田（いけだ）　忠士（ただし）さん

池田さんは、集会所の鍵の管理も担当しています。

時間があるときは、集会所を開放し、お湯を沸かして前を通る住民に「元気かなぁ」と声をかけたり「お茶飲んでいかんか？」と誘います。

立ち話もいいけれどせっかく用意してくれた机や椅子も活用しないともったいない。

池田さんの優しい手招きで自然発生仮設カフェは大盛況です。

柳井原仮設団地の連絡のとりまとめを担当する池田さん。仮設と地域をつなぐ仕掛人です。

池田さんの趣味は、グラウンドゴルフ。遠征で県外の大会にも参加します。仮設団地の中でもグラウンドゴルフ愛好者やこれから始めたい人も多くいることを知り、チームを結成しました。週3回朝から、30名近くの方が集まり笑い声や歓声を響かせています。仮設団地以外の方も多く参加しています。

広江

「サテライト　ひろえ」

助けられる人から助ける人へ
広江に集結した支え合いの心

7月の豪雨で真備地区以外の倉敷市内でも、道路の冠水や家屋の浸水、がけ崩れ等多くの被害がありました。

水島地区のコスモタウン広江団地は7日の夜に土砂崩れで家や道路に大きな岩や大木、泥が流れ込みました。

倉敷市災害ボランティアセンターが開設した「サテライトひろえ」には、市内外から多くのボランティアが集結しました。

5日間にわたるサテライトの運営を支えたのは、約千人のボランティアと地元住民・地元の団体による**助け**合いでした。広江の住民は「被災者」でありながらもサテライトの運営に携わる「支援者」でもありました。

困ったときはお互いさま、向こう三軒両隣を越えたつながりが、被災された方々の心を癒し、これからの地域づくりの大きな支えとなっていきます。

ボランティア活動の様子

住民も運営ボランティアに参加

広江の被災者支援に、若いママ達も立ち上がりました。
いつもは、三世代交流サロンでわが子を見てくれる地域の「じいじ」から「避難している子どもたちに、食べるものが欲しい」という連絡を受け、被災地以外の地区に住むママたちは、すぐにいつものサロン会場に集まり、炊き出しの準備を始めました。

ママたちによる炊き出し支援は、計４回にわたって行われました。何気ない日頃からの世代を超えたつながりは、お互いを支え合い、助け合える関係になっていました。
「助けて」と「助けたい」が自然と重なった瞬間が被災地にありました。

広江の支えびと

「災害の記憶を風化させずに後世へ」

城内（しろうち）　豊司（とよじ）さん（倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会）

梅干しを食べている城内さん。猛暑の中、熱中症予防の梅干しは欠かせません

倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会水島支部長として活動する城内さん。コスモタウン広江団地の土砂災害が起きた今回、災害ボランティアセンター「サテライトひろえ」の運営を担いました。

「当初はみんな真剣、一生懸命だったから意見がぶつかり合うこともあったけど、だんだんと分かりあえて協力して、和気あいあいと運営することができた。ボランティアさんが本当にたくさん来て助けてくださった。感謝している」

サテライトひろえが閉所した後は、真備地区の呉妹サテライトでほぼ毎日、その後も市災害ボランティアセンターが移転してからも運営を担い続けています。

また、「今回の災害を風化させることなく後世に伝えることも大切。みんなの記憶を記録として残し、災害時の備えの大切さを伝えたい」と資料づくりにも余念がありません。

サテライトひろえを開所した日、水島支所にも張り紙をして説明をしている様子

下津井(しもついい)

「下津井地区　災害ボランティア」

『思いを馳せる』地域を支える原動力

平成30年7月豪雨により、土砂崩れに見舞われた下津井大畠(しもついおばたけ)地区では、地元へ思いを馳せる人々の「つながり」が地域を支える原動力となりました。

被災者のため、地元自治会を始め、倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会児島支部、岡山県立倉敷鷲羽高校の男子バスケ部、女子バスケ部、男子バレー部、レスリング部、下津井・赤崎・郷内高齢者支援センター、介護老人保健施設オアシスK－3、株式会社トーカイ倉敷営業所、岡山県社会福祉士会等、「つながり」が「つながり」を呼び、総勢約60名の方々が駆けつけてくれました。

今回の活動では、年長者は「知恵」を、若者は「体力」を出し合い、お互いに得手不得手を補いながら、被災者のため、家屋や庭に入った土砂を運び出しました。

「世代を超えたつながり」、これからの地域に欠かすことのできない「力」が、下津井大畠地区に生まれた瞬間でした。

平成３１年１月現在の様子

皆で土砂を運び出した後のお庭には、野菜も育っており、被災者の方は、「自分達だけではどうしようもなかった。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとう」とおっしゃっていました。

倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会児島支部は、日頃から災害ボランティアコーディネーターの学習、他団体との情報交換やネットワークの構築、防災減災意識の普及活動のために活動されています。

下津井大畠地区の被災現場においては、現地調査からはじまり、日頃からのつながりを活かして、情報収集や協力者を募る呼びかけ等に尽力しました。

倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会　児島支部

岡山県立倉敷鷲羽高校レスリング部

倉敷鷲羽高校レスリング部の生徒の皆さんは、「今まで災害現場といえば、報道を通してしか見たことがなかった。今回、災害ボランティアを経験して、直に足を踏み入れてこそ理解できる被災地の痛みを知ることができた。災害はいつ起こるかわからないので、今回の経験を活かして、今後も困っている人や、地域の力になりたいと思う」と強く語ってくれました。

下津井の支えびと

【デニムで復興支援プロジェクト委員会】

下津井地区東西地区社会福祉協議会 ✗ ㈱晃立 ✗ 高木ソーイング㈱ ✗ ㈱モリフロッキー ✗ 下津井郵便局

西日本豪雨において被災された方々の一日も早い復興を願って、地区社会福祉協議会と児島デニムの企業等が共同し、児島産デニム約３００本を被災者に提供しました。

委員の方々は「被災地の状況を知ることで、何が求められているのか、自分達には何ができるかが発見できた。同じ倉敷市民同士、支え合っていきたい」と語ってくれました。

このプロジェクトの発起人、わしゅう下津井東地区社会福祉協議会の高木会長（上）は、「被災した人に少しでも前向きになってもらいたいんじゃあ」と一本一本心を籠めて準備をされました。